

駿河台大学資格課程年報

*Surugadai University qualification
course annual report*

司 書 課 程
学 芸 員 課 程
司 書 教 諭 課 程

No.19
(2018)

ごあいさつ

駿河台大学資格課程 主任 杜 正文

『駿河台大学資格課程年報』第19号をお届けいたします。

1994年3月に駿河台大学文化情報学部が創設され、1995年4月に、文化情報学部資格課程（司書課程・学芸員課程）が設置されました。開設7年目の2001年に『駿河台大学資格課程年報』創刊号を刊行しました。そして、その後も継続して年報を刊行し、今年度も無事に第19号を刊行することとなりました。

司書課程においては、資料情報の組織化及び検索・提供を行う司書の育成を行っています。文字情報だけでなく、映像や音響も含めた多様な情報に対する理解や対処ができる、まさに情報の専門家の役割を果たす人材の育成をめざしています。

学芸員課程においては、博物館資料の展示・教育活動等の情報社会における意義・役割を重視したカリキュラムを設置し、資料情報のデータベース化やインターネット上での公開などの情報処理技術を身につけた新しい学芸員の育成をめざしています。

2004年4月から、司書教諭課程も開設され、司書教諭資格を取得するために必要な資格申請を行なうことができるようになりました。

2009年度には『メディア情報学部』が誕生し、駿河台大学資格課程は同学部に設置されています。資格課程は、メディア情報学部のほか、法学部・経済経営学部・現代文化学部・心理学部の学生も学ぶことができるようにされています。

2013年度からは、図書館法および博物館法の改正に伴い、それに沿った新しいカリキュラムが開始されています。

また本学では、学外実習が始まった当初から教員がそれぞれの実習館を訪問し、実習生を受け入れてくださっている博物館とのコミュニケーションを図ってまいりました。これまでご理解・ご協力いただいた館園には、厚く御礼申し上げます。この年報を通して本学の資格課程カリキュラムの内容をご確認いただけましたら幸いです。

= 目 次 =

ごあいさつ	杜 正文
I. 司書課程	
駿河台大学 司書課程について	水沼 友宏 ・ ・ ・ ・ 6
II. 学芸員課程	
駿河台大学 学芸員課程について	野村 正弘 ・ ・ ・ ・ 10
実習館訪問記：（「入間市博物館 ALIT」訪問報告）	五味渕 久美子 ・ ・ ・ ・ 14
《博物館実習 体験記録》	
博物館実習を終わって・レポートから	博物館実習生 ・ ・ ・ ・ 16
III. 司書教諭課程	
駿河台大学 司書教諭課程について	杜 正文 ・ ・ ・ ・ 34
資 料	
博物館実習協力館一覧（過去 3 年分） 2016 年度、2017 年度、2018 年度	
2018 年度資格課程（司書課程・学芸員課程・司書教諭課程）修了者	
司書課程科目担当教員一覧	
学芸員課程科目担当教員一覧	
司書教諭課程科目担当者一覧	

I . 司書課程

駿河台大学 司書課程について

メディア情報学部 助教 水沼 友宏

司書課程の特色

駿河台大学では1994年文化情報学部創設の翌年に資格課程として司書課程と学芸員課程を設置し、これまで1,200名以上の資格取得者を輩出している。2001年度より資格課程は全学に開かれ、他学部の学生も履修できるようになった。さらに、2004年度からは司書教諭資格課程を設置し、50名以上が司書教諭資格を取得している。

2009年に文化情報学部はメディア情報学部に変更された。メディア情報学部は、映像・音響メディアコース、デジタルデザインコース、図書館・アーカイブズコースの3つのコースで構成されており、様々なメディアの本質を理解し、各種メディアに精通し、多元的メディア社会に即戦力となる人材の育成を目標としている。

司書が専門的な業務を遂行する職員としてたずさわる図書館には、公共図書館・学校図書館・大学図書館に加えて、企業等に設置されている専門図書館・情報センターがあり、それぞれの利用者のニーズに応じて様々な情報サービスを提供している。駿河台大学の司書課程ではメディアと情報資源に関する全般的な知識や技術を学んだ上で、司書資格を取得することにより、今後のマルチメディア時代に公共図書館だけでなく、大学・専門・学校図書館などでも役に立つ図書館・情報専門職の教育を行っていることが特色である。

司書課程4年間の流れ

司書資格のための科目は1年次から開講されている。4年次までに資格に必要な科目を計画的に修得し単位をそろえる。2013年度以降の入学生を例に、4年間の履修の流れを紹介する。(司書課程科目一覧を参照)

1年次： 入学してすぐに資格課程登録ガイダンスを受け、『資格課程受講登録』を行う。授業に出席し単位を修得する。1年次から開講される必修科目は「生涯学習概論」「児童サービス論」の2科目である。

2年次： 授業に出席し単位を修得する。2年次から開講される必修科目は「図書館情報学」「情報サービス論」「情報サービス演習Ⅰ(基礎)」「情報資料論」「情報組織化論」の5科目である。選択科目も適宜修得する。

3・4年次： 授業に出席し単位を修得する。3年次から開講される必修科目は6科目(講義科目2科目、演習科目4科目)で、必ず修得し、また選択科目を適宜修得する。そして司書資格に必要な単位(30単位)をそろえる。

司書課程科目一覧（2013年度以降入学生適用）

区分	図書館法施行規則によって定められている科目	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数	
必修科目	甲群	生涯学習概論	2	生涯学習概論	2	1	13科目 26単位 必修
		図書館概論	2	図書館情報学	2	2	
		図書館制度・経営論	2	図書館・情報センター経営論	2	3・4	
		図書館情報技術論	2	図書館情報システム演習	2	3・4	
		図書館サービス概論	2	図書館サービス論	2	3・4	
		情報サービス論	2	情報サービス論	2	2	
		情報サービス演習	2	情報サービス演習Ⅰ（基礎）	2	2・3	
				情報サービス演習Ⅱ（発展）	2	3・4	
		図書館情報資源概論	2	情報資料論	2	2	
		情報資源組織論	2	情報組織化論	2	2	
		情報資源組織演習	2	情報組織演習Ⅰ	2	3・4	
				情報組織演習Ⅱ	2	3・4	
児童サービス論	2	児童サービス論	2	1			
選択科目	乙群	図書館情報資源特論	1	歴史資料論	2	3・4	2科目 4単位 以上
				デジタル・アーカイブス論	2	3・4	
		図書館サービス特論	1	コミュニケーション論	2	2・3	
		図書館基礎特論	1	情報処理概論	2	1	

司書課程科目一覧（2017年度以降入学生適用）

区分	図書館法施行規則によって定められている科目	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数	
必修科目	甲群	生涯学習概論	2	<u>生涯学習論</u>	2	<u>2</u>	13科目 26単位 必修
		図書館概論	2	図書館情報学	2	<u>1</u>	
		図書館制度・経営論	2	<u>図書館制度・経営論</u>	2	3・4	
		図書館情報技術論	2	<u>図書館情報技術論</u>	<u>2</u>	<u>2</u>	
		図書館サービス概論	2	<u>図書館サービス概論</u>	2	<u>1</u>	
		情報サービス論	2	情報サービス論	2	2	
		情報サービス演習	2	情報サービス演習Ⅰ（基礎）	2	<u>3・4</u>	
				情報サービス演習Ⅱ（発展）	2	3・4	
		図書館情報資源概論	2	<u>図書館情報資源概論</u>	2	<u>1</u>	
		情報資源組織論	2	<u>情報資源組織論</u>	2	2	
		情報資源組織演習	2	<u>情報資源組織演習Ⅰ</u>	2	3・4	
<u>情報資源組織演習Ⅱ</u>	2			3・4			
児童サービス論	2	児童サービス論	2	<u>2</u>			
選択科目	乙群	図書館情報資源特論	1	歴史資料論	2	3・4	2科目 4単位 以上
				デジタル・アーカイブス論	2	3・4	
		図書館サービス特論	1	コミュニケーション論	2	2・3	
		図書館基礎特論	1	情報処理概論	2	1	
		図書館総合演習	1	<u>図書館総合演習</u>	<u>2</u>	<u>3・4</u>	

（前カリキュラムからの変更点に下二重線を付した。）

II. 学芸員課程

駿河台大学 学芸員課程について

メディア情報学部 教授 野村 正弘

学芸員課程の目標と経過

駿河台大学の学芸員課程は、メディア情報学部設置されている。メディア情報学部の教育目標の一つは、「情報メディアエーター」の養成である。この「情報メディアエーター」とは、人間の文化的営みに関する諸々の資料などに関する専門的知識を持つとともに、これらの資料情報をシステム化し、データベース化するための情報処理技術を身につけ、これらの資料に関する要求に対して適切な情報提供の仲介を行う専門家のことである。文化資料の宝庫とも言える博物館の「情報メディアエーター」とは、その能力をもつ博物館学芸員を意味する。

この目標を達成するため、メディア情報学部の前進である文化情報学部のカリキュラムには、学部設置当初から博物館関係の科目が設けられた。1995年、博物館法施行規則にもとづく学芸員資格取得のための必要科目も開設された。また同年、学芸員課程と司書課程を合わせた「文化情報学部資格課程」が設置され、専門的知識と情報処理技術を身に付けた学芸員の養成が本格的に開始された。

その後、1996年の博物館施行規則改正に伴い、1997年度から必修科目が開講されている。2001年度には、他学部の学生や学外の科目等履修生も学芸員の資格取得を目指せるように、学則および科目の一部を改正した。資格課程も学部規模から大学規模に拡大され、現在は全学部からの委員で構成される「資格課程委員会」がその運営に当たっている。

学芸員課程の履修科目

1995年の開講時には、必修科目として6科目14単位、選択科目では12科目の中から4科目8単位以上、人文・自然科学系科目として10科目の中から3科目6単位以上の履修が資格取得に必要なように設定された。

1996年度の博物館法施行規則の改正にともなって、必修科目に「生涯学習概論」、「博物館概論」を追加し、必要単位数を8科目18単位とした。さらに、2001年度から、文化情報学部のカリキュラムの一部改正、ならびに資格課程を本学の他学部、科目等履修生に開講したことにもない、一部科目の新設ならびに入れ替えを行って、学芸員資格取得に必要な科目を加え改正した。

主な変更点は、次の通りである。必修科目では「博物館資料論」を設け、選択科目では科目を一部入れ替えるとともに、他学部開放にもない人文・自然科学系科目をA、Bの二つに分け、それぞれⅡ群、Ⅲ群とした。履修方法は、Ⅰ群は、受講者全員が履修することとし、Ⅱ群、Ⅲ群の科目からは2科目4単位以上を自由選択により修得しなければならないことにした。また、「博物館実習」は、年間を通して大学で行う学内実習と博物館などの現場施設で行う学外実習を合せて実施している。

2013年度からは博物館施行規則改正に伴う新科目の開設を行い、別表1のカリキュラムでの学芸員養成を行っている。2017年度からは、配当年次、選択科目の見直し等を行い、資格を取得しやすくして、別表2のカリキュラムでの学芸員養成を開始している。

履修登録および博物館実習への対応

学芸員課程の履修については、毎年、「資格課程履修ガイド」を発行し、学生に配布して周知を図っている。これに基づく年間スケジュールでは、まず、毎年4月、1年次生および3年次編入生を迎えた段階で、司書課程と合同で「資格課程登録ガイダンス」を行い、その後、学芸員課程の履修を希望する学生は、登録期間内に本学の所定の方法にしたがってメディア情報学部教務課窓口で登録することになっている。

博物館実習については、3年次生を対象に、毎年11月中旬に第1回のガイダンスを行い、博物館実習の実施内容や実施上の注意事項を改めて説明している。そのとき、実習館園に関するアンケート調査を行い、その後のガイダンスで担当教員と学生が相談しつつ実習希望館園を絞り、適時学生自身に申し込みをさせている。その後も、申し込みの状況や途中経過などを確かめ、およそ3月～4月末までに学生各自の実習館の内諾をいただけるようにしている。内諾をいただいた実習予定館園に、正式に文書で依頼している。

実習直前には、実習予定学生に対して「実習直前ガイダンス」を行っている。ここでは、博物館実習は、実習実施に当たっての諸注意や期間中の連絡体制等を説明し、実習日誌などを配布して、実習の心構えと準備を整えさせている。実習が始まると、担当教員ができるだけ実習期間中に各実習館園に挨拶に伺って、実習状況の確認と実習学生の激励を行い、以後の学生受入についてお願いしている。なお、資格課程に関わる一連の事務は、メディア情報学部教務課職員がその処理に当たっている。

学芸員資格課程の今後

1997年度に初めて、本学の学芸員資格課程で86名が学芸員の資格を取得したが、2013年度の法改正後は5～6名の学生が資格を取得している。しかし、博物館に就職した者は数名にすぎない。学芸員募集には、募集分野の細分化や高学歴化の傾向、施設運営の指定管理制度導入の影響が見られ、資格を持ちながらそれを活かす職に就けない状況が続いている。これは本学資格課程だけの問題ではなく、学芸員課程を開設している日本全国の大学に共通な問題である。

一方、学芸員資格を重視して採用を行ってくれる企業も、多くはないものの存在する。そこで本学では、博物館実習を一種のインターンシップの場としても捉えている。幸い、実習博物館でも、実習学生の受け入れを社会教育施設の業務の一つであると解して協力してくれるところもあり、今後大学と博物館とのさらなる連携が期待される。

別表1 学芸員課程科目一覧（2013年度以降入学生適用）

区分	博物館法施行規則によって定められている科目等	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数
必修科目	生涯学習概論	2	生涯学習概論	2	1	10科目 22単位 必修
	博物館概論	2	博物館概論	2	2	
	博物館経営論	2	博物館経営論	2	3 4	
	博物館資料論	2	博物館資料論	2	3 4	
	博物館資料保存論	2	博物館資料保存論	2	3 4	
	博物館展示論	2	博物館展示論	2	2 3 4	
	博物館教育論	2	博物館教育論	2	2 3 4	
	博物館情報・メディア論	2	博物館情報学 マルチメディア論	2 2	3 4 2	
博物館実習	3	博物館実習	4	4		
選択科目	I群	資料・情報管理系科目	アーカイブズ学	2	3 4	2科目 4単位 以上 選択
			映像メディア論	2	3 4	
			音響メディア論	2	3 4	
			データベース設計論	2	3 4	
			ネットワーク構築論	2	3 4	
			デジタル・アーカイブズ論	2	3 4	
	II群	人文・自然科学系科目	歴史資料論	2	3 4	4単位 以上 選択
			都市と文化施設	2	2	
			文化人類学Ⅰ	2	1 2	
			文化人類学Ⅱ	2	1 2	
			歴史学Ⅰ	2	1 2	
			歴史学Ⅱ	2	1 2	
			環境生物学Ⅰ	2	1 2	
			環境生物学Ⅱ	2	1 2	
			生命の科学Ⅰ	2	1 2	
			生命の科学Ⅱ	2	1 2	
			現代自然科学Ⅰ	2	1 2	
			現代自然科学Ⅱ	2	1 2	
			地球科学	2	1 2	
			法史学Ⅰ	2	2 3	
経済史Ⅰ	2	1				
経済史Ⅱ	2	1				
日本文化論Ⅰ	2	2				
メディア社会学	2	2 3				

別表2 学芸員課程科目一覧（2017年度以降入学生適用）

区分	博物館法施行規則によって定められている科目等	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数
必修科目	生涯学習概論	2	<u>生涯学習論</u>	<u>2</u>	<u>2</u>	10科目 20単位 必修
	博物館概論	2	博物館概論	2	<u>1</u>	
	博物館経営論	2	博物館経営論	2	<u>2</u>	
	博物館資料論	2	博物館資料論	2	<u>2</u>	
	博物館資料保存論	2	博物館資料保存論	2	3 4	
	博物館展示論	2	博物館展示論	2	2	
	博物館教育論	2	博物館教育論	2	2	
	博物館情報・メディア論	2	<u>博物館情報・メディア論</u>	2	3 4	
	博物館実習	3	<u>博物館実習Ⅰ</u>	2	4	
<u>博物館実習Ⅱ</u>			2	4		
選択科目	資料・情報管理系科目		<u>マルチメディア論</u>	2	2	8単位 以上 選択
			アーカイブズ学		3 4	
			映像メディア論	2	3 4	
			音響メディア論	2	<u>2</u>	
			データベース設計論	2	3 4	
			ネットワーク構築論	2	3 4	
			デジタル・アーカイブズ論	2	3 4	
	人文・自然科学系科目		歴史資料論	2	3 4	
			都市と文化施設	2	2	
			文化人類学Ⅰ	2	1 2	
			文化人類学Ⅱ	2	1 2	
			歴史学Ⅰ	2	1 2	
			歴史学Ⅱ	2	1 2	
			環境生物学Ⅰ	2	1 2	
			環境生物学Ⅱ	2	1 2	
			生命の科学Ⅰ	2	1 2	
			生命の科学Ⅱ	2	1 2	
			現代自然科学Ⅰ	2	1 2	
			現代自然科学Ⅱ	2	1 2	
			地球科学	2	1 2	
			<u>法史学</u>	2	2 3	
			経済史Ⅰ	2	1	
			経済史Ⅱ	2	1	
			日本文化論Ⅰ	2	2	
			<u>日本文化論Ⅱ</u>	<u>2</u>	<u>2</u>	
			<u>西洋文化史</u>	<u>2</u>	<u>2 3</u>	

(前カリキュラムからの変更点に下二重線を付した。)

入間市博物館を訪問して

心理学部 五味渕久美子

逆送台風のため予定どおりに実習館訪問ができるかやきもきしましたが、未明までの大雨もなんとか止み、蒸し暑さが戻った7月29日に、入間市博物館を訪問致しました。入間市駅よりバスでの25分弱の道のりですが、自然に囲まれた静かな環境の中、小高い場所に博物館がありました。ちょっと登っていくと周囲がパーと開け、目の前に広がる眺めの良さに驚きました。どっしりした概観の建物の中に入ると、ゆったりとしたスペース取りの明るい吹き抜けのエントランスに受付がありました。本日は常設展の他に、ボランティアの方々も参加しているという「キッズ・アートギャラリー」も開催ということで、博物館のスタッフの方々の忙しいのがよく分かりました。そのようなお忙しい時期に、学生たちの実習を受け入れて指導して下さるので、恐縮してしまいました。

あいにく加藤公章指導主事が不在とのことで、津久井浩一副主幹が対応してくださいました。入間市博物館はメディア学部以外の学部の学生であっても実習生として受け入れることや、なるべく入間市近郊に在住の学生を受け入れたいといった、とてもありがたい受入体制の方針です。私は心理学部の教員ですので、通常では博物館実習の訪問に係わることはないのですが、今年は私のゼミの学生の新井岳志君が実習でお世話になっているために、このような機会を得ることができました。

実習生の戸田琴音さんと新井君は他の大学の実習生と一緒に、8月1日から始まるイベントの準備に追われているということでした。新しい試みで子どもたちがDSでクイズ形式の展示ガイドを受診して博物館の見学をするというもので、このガイドの案内文を作るという作業だそうで、書く文章ではなく、相手に伝えるための話す文章なので、実習生は四苦八苦しているようだと、津久井副主幹からお聞きしました。説明を聞くだけの私ですからなかなか面白そうな企画だと思いましたが、準備をする当の学生にしてみたらさぞ大変だろうと思ったりもしました。

そのためでしょうか、津久井副主幹に案内をしていただきながら、常設展示の「歴史の部屋」「茶の世界」を回って行く際、ちょうど実習している学生たちを発見(写真1)、皆で展示を一生懸命見ながら案を考えているようでした。遠くから彼らの様子を見ただけですので、どのような話をしているか分かりませんが、皆がなにやら打ち合わせしたり、デジカメで写真に納めたりしていて、彼らなりにがんばっているようでした。その後から私も展示物を見せていただきました。しかも学芸員というプロの解説がついたという特典付きでした。(お忙しいのに申し訳ないと心の中は恐縮しきりでしたが。)この博物館は「お茶の世界」を紹介しているという他の博物館にはない展示があり、入間という土地を特徴づけていました。

一回了りしたところで、学生たちの打ち合わせ現場にお邪魔しました（写真2）。というより、本当にお邪魔する形になり、彼らの打ち合わせをちょっと中断させてしまいましたが、戸田さんや新井君が他大学の実習生たちと和気藹々とやれている様子が見て取れました。このように普段接することがあまりない他大学の学生たちと同じ目的で、一緒に時間を過ごすのは実習プラスアルファのかけがえのない体験になっているのではないかと思います。実習にしても専門的な勉強をするのはもちろんですが、そこに働くいろいろな職種の方々と接すること、大学という小さな社会からより大きな社会に接すること、博物館に来る子どもたちと接することなど、いろいろな人と接する良い機会だと思います。なかなかできない経験だと思います。そういう貴重な体験をしているのだと実習を行いながら、学生たちが感じてもらえることを願ってやみません。

こういった貴重な実習体験を作ってください、学生たちを受け入れてくださる入間市博物館の西勝啓祐館長はじめ、皆さまには心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。



写真1 展示室で実習中の学生達



写真2 打ち合わせ中の学生達

博物館実習を終わって ―課題レポートから―

〈総合博物館での実習〉

入間市博物館 ALIT

メディア情報学部メディア情報学科 4年 戸田琴音

2018年7月21日から2018年8月5日までの14日間、埼玉県入間市にある入間市博物館にて博物館実習をさせていただきました。入間市博物館は ALIT という愛称があり、A は Art・Archives、L は Library、I は Information、T は Tea の意味を持っています。これらの内容を取り扱う総合博物館では様々な体験ができました。

主な実習内容は展示ガイドの作成、イベントの運営補助、清掃・整理でした。展示ガイドの作成は、家庭用ゲーム機を使って常設展示の展示ガイドをつくるという実習でした。家庭用ゲーム機ということで主なターゲットは子どもたちであったため、子どもたちに興味を持ってもらえるような、子どもたちがわかりやすいような展示ガイドをつくることが目標となりました。子どもたちに興味を持ってもらえるようにクイズ形式で展示ガイドを作成することに決定し、実際に常設展示を見て回りながら、どの展示を問題にするかを考えました。難しかったのは言葉の噛み砕き方です。難しい言い方では子どもたちが理解出来ないし、問題の出し方も文章ではなく音声という方式だったので別の言葉に聞き間違いの可能性も考慮しなければなりませんでした。問題と解答、各30秒ずつという決まりの中で、どうしたら面白く分かりやすいものになるか試行錯誤を重ねました。音声も実習生が担当し録音作業を行いました。アクセントが分からず苦戦する場面もありました。この展示ガイドは「アリットクエスト」というイベントとして2018年8月1日から 2018年8月9日まで開催されることになり、宣伝ポスターも実習生が作成しました。誰にも参加してもらえなかったらどうしようと不安でしたが、参加してくださった方が何名もいらっしゃってとても嬉しかったです。中でも特に嬉しかったのが、宣伝ポスターを見ていた子に「それお姉ちゃんたちがつくったんだよ、面白いからよかったらやってみて！」と声をかけたら、その後参加してくれたことです。「頑張っただね！」と言ったら「がんばる」と返してくれました。そのときに頑張っただけで良かったなあと思いました。こういったことが仕事のやりがいに繋がるのだろうと強く実感しました。

運営補助の実習は「こどもお茶大学」というイベントでした。1 日目がお茶の葉っぱから緑茶と紅茶をつくるという内容、2 日目がお茶の歴史や作法を学び、実際に茶席を体験するという内容でした。紅茶をつくるには茶葉を 1 日寝かせなければならないので、イベントの前日にあらかじめ茶摘みを行いました。炎天下の中、虫がたくさんいる茶畑で茶摘みをするのはかなり大変でした。実習で最も大変だったかもしれません。イベント当日も茶摘みを体験してもらうためにもう一度茶摘みをしました。茶摘みが終わった後は緑茶班、紅茶班に分かれての茶葉づくりです。私は紅茶班を担当し、茶葉をひたすら揉む作業を見守ったり、揉むことに疲れてしまった参加者の方々に代わって茶葉を揉んだりしました。作業は単純ですが作業をする中で参加者の方々とコミュニケーション

をとる機会がたくさんあり、こういった交流が出来るイベントはとても良いなと思いました。午後からは私のみ「夏休み親子で楽しむ遊びの広場」という別イベントの運営補助に回りました。このイベントは家庭にあるような道具、例えば割り箸やペットボトルのキャップ、スーパーボール、傘……等を使った遊び道具を展示し、実際に遊んでもらうという内容です。任された仕事は参加人数をカウントすることだったのですが、スタッフが少なかつたこともあり、遊び方の解説をしたり、子どもたちとお話ししたりするという場面も多々ありました。子どもたちがたくさん話しかけてくれたことによって、どういった接し方をすると喜んでもらえるのか、どういったサービスが求められているのかを知る良い機会となりました。2日目は茶席の案内、片付けを行いました。難しかったのは掛け軸の片付けです。掛け軸を上手く巻くことが出来ずかなり苦戦しました。茶の道具は収納の仕方も細かい決まりごとがあり、担当出来る方も少ないそうです。慣れだからと仰っていただきましたが、上手く出来なかつたことがとても悔しかったです。

実習の中で茶摘みと同じくらい大変だったのが清掃・整理です。仮保管庫、旧黒須銀行、収蔵庫の清掃・整理をさせていただきました。仮保管庫と旧黒須銀行は温湿度管理を徹底しているわけではないため、外より少し低いくらいの温度での清掃となりました。仮保管庫は濡れた新聞紙を散らしての掃き掃除、旧黒須銀行はほうきを使った掃除と資料の整理・運搬、収蔵庫ははたきを使って棚からほこりを落とし、最後に床を雑巾で拭くという清掃でした。資料に気を付けながら細部まで掃除をするというのはかなり神経を使います。たくさんの仕事をこなす中で倉庫の清掃・整理も行わなければならないというのはかなり大変だろうなと思いました。倉庫や資料の清掃・整理はいわゆる「雑芸員」と呼ばれてしまうものの一つではありますが、実際に体験してみてもかなり大切な仕事だと思いました。館長さんが「清掃・整理を雑務だと思う人は学芸員にはなれないと思う」と仰っていましたがその通りだと思います。

他にも毎朝温湿度管理のために温湿度を記録したり、資料調査実習で砂から砂鉄を抽出したり、展示作業をしたりと様々な実習をさせていただきました。授業で学んだ知識をより一層深めることが出来たし、授業では教わらなかつたことも体験できました。博物館についてや学芸員の業務はもちろん、仕事への態度、人との接し方、イベントの運営等これからの人生でも大切なことをたくさん教えていただきました。貴重な経験ができ、学芸員実習をさせていただいて良かったと心から思います。今回学んだことはしっかりと今後に生かしていきたいです。

入間市博物館 ALIT

心理学部心理学科 4年 新井岳志

私は7月21日から8月5日までの約2週間、入間市博物館で学芸員実習をさせていただきました。入間市博物館は、お茶・歴史・自然・科学の4つの常設展示を備えた総合博物館である。常設展示のほかにも特別展示室も備えており、イベントや企画展示に使用できる。愛称のアリットは入間市民の案により採用されたもので、Art（美術）・Archive（保存）、Library（図書館）、Information（情報）、Tea（お茶）の頭文字をとって入間市博物館の機能・コンセプトを表している。現在は指定管理者

制度を導入しており、運営・管理・企画の一部を業務委託している。

実習初日の実習内容は館内の案内、博学連携事業について講座であった。館内案内では通常は入ることのできないバックヤードを見学させていただいた。トラックなどで搬入される資料を受ける搬入室、その資料を収蔵庫へ入れる前に保管する荷解き室、展示を作ったり資料を修復したりする学芸作業室など今まで見ることのなかった博物館の裏側をたくさん見ることができた。博学連携事業についての講座では、小学校の先生である指導主事の方から博学連携の意義や、入間市における教育理念と博物館学習の親和性を知ることができた。

本格的な実習になってからは、入間川における砂鉄の含有割合及び分布調査の補助を行った。入間市博物館では、市民を対象に「ALIT お茶大学」という講座を開講しており、ゼミ形式の研究生コースでは市民と学芸員が共同で調査研究を行い、その成果を展示や講座に活かす成果循環型の事業を実施している。今回の実習で行った調査もその一環であり、研究生コースを受講している市民の方で行った。作業は研究生と学芸員の方があらかじめ採取していた試料である入間川各所の砂利の量を、調査をするためにおおよそ一定に調整するというものだった。この際粒度に偏りを生じさせないため、四分法という方法を用いた。調査で正確なデータをとるためには、本当にいろいろな配慮が必要になると思った。各試料の量を統一した後、段階的にふるいにかけ、粒の大きさごとの砂鉄の含有量を調べるまでが調査だったが、この調査はこの日だけでは終わらなかったので後日の実習で再び行った。他にも様々な実習をさせていただいた。

3日目と8日目には、家庭用ゲーム機を使った展示ガイド作成を行った。ガイドの拡張において家庭用ゲーム機を使うことのメリット・デメリットや、ターゲットの絞り込み、それに準じた内容の推敲、ガイドポイント間の動線などいざ作ろうとすると、考えるべきことが次から次へと出てきて何度か修正することになった。また、このガイド作成実習では他大学の実習生の功績が大きかった。今後学芸員に求められるスキルについて考えさせられた。

4日目には仮保管庫の清掃を行った。仮保管庫には大きさから移動が難しい資料や、燻蒸の難しい資料が保管されていた。収蔵庫のような遮断性はなく、温湿度の管理も難しいうえに砂ぼこりが大量に入っていたが、今ある資料を最善の状態に保管することも学芸員の仕事だと思った。仮保管庫清掃を終えたあとは展示の更新の補助を行った。展示の更新も継続しなければならない学芸員の活動の1つだと思った。

5日目には旧黒須銀行へ行き、清掃、資料整理を行った。旧黒須銀行は銀行としての役目を終えたあと民芸館として一般公開されていた期間があり、入間市博物館の開館に伴い閉館したが、当時の資料が残されていた。建物内を清掃し、残されていた資料を博物館の仮保管庫へ運び込んだ。その後、収蔵庫でのデータベースへの資料登録の作業の一部をさせていただいた。まず、資料の特徴を紙に書きだしていくのだが、ここで記録しておかなければならない情報の多さに驚いた。モノの材質、箱などの状態、書き込まれている文字まで記録しなければならないのである。データと資料を一致させやすくする、ここで記録した情報からその資料に違う見方が生まれるなどの理由があると知ることができた。

6日目の実習では収蔵庫の清掃を行った。水拭きとはたきを使い分けながら資料や棚の上を掃除し

ていった。最後は床を水拭きと掃除機で仕上げた。外気からほとんど遮断されている収蔵庫でも結構な量のほこりが集まり、やはり掃除は必要だと思った。また、収蔵庫内は資料が所狭しと並んでおり、とても緊張感があり、いつもより疲れやすかったように思えた。慎重に掃除しようとするとしても時間がかかり、終わった時の疲労感はかなりのものであった。

7日目の実習では台風接近のため実習は午前中のみとなった。この時には事務室で会議が行われ、職員や学芸員の方は対応に追われていた。この日のスケジュールとしてキッズアートギャラリー、サイエンスバーなどのイベントが予定されていたが、結果としてイベントは中止となった。このような不測の事態への対応も、イベントを開催する側には求められると思った。

実習9日目にはイベント「こどもお茶大学」に使う茶摘みをし、10日目には「こどもお茶大学」にて運営補助を行った。この日の内容は家庭にある道具で茶葉から緑茶や紅茶を作ろうといったものだった。実習生は子供たちに作業を教える、危険のないように見守るなどをした。10日目の実習は一日中「こどもお茶大学」であり、学芸員の方もつきっきりだった。一つのイベントにどれだけの労力が割かれているかを実感した。また、ボランティアの方々にも大変お世話になった。このような連携をとれるか否かでイベントの充実度も変わってくると思った。

11日目と12日目にはSMF（サイタマミュージックフォーラム）とアリットの主催する「電子音響ビープルプロジェクト2018@入間市博物館 ALIT」というワークショップに参加した。SMFは主に埼玉県で活動している様々な領域の芸術活動を事業としている団体であり、このワークショップは普通、音楽には使わない音の出るものとコンピュータを使って新しい音楽を作ろうといったもので私はブンブンゴマを使い参加した。担当の学芸員の方によるとアートを体験する、作るといったことは教育とは違う枠組みにあるため、SMFとの連携事業は普段のアリットの活動とは異なる視点や内容を入れていこうとしているようである。私は今回のイベントを通して、アリットで芸術関係の連携事業を行っていくこともじっくりくるように感じた。

私は今回の実習を通して、本当に様々な体験をすることができた。学芸員の仕事の多様さを実感した2週間だった。また、これらの仕事を知ることが出来て良かったと思った。学芸員実習を受け入れてくださった入間市博物館の職員の皆様に心から感謝したい。

《歴史博物館での実習》

石垣市立八重山博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 請舩庄一朗

私は、石垣市立八重山博物館にて8月28日から9月2日までの間、博物館実習をさせていただきました。八重山博物館は沖縄県石垣市の市街地にあり、八重山諸島の歴史や民俗に関する資料の収集、保存、調査研究等を行っています。資料については民具や書跡等の歴史資料が多く、教育・普及事業として子ども向けに昔ながらの民具や遊具の作り方を教える子ども教室や、年間を通して石垣市内の小学生の高学年向けに市内の史跡や自然をめぐり、有識者ととも解説を行う子ども博物館教室なども行っています。

この実習では、実習できる時間が短かったことや、館の所在地が沖縄の離島であるために、事前の打ち合わせが思うように進まず、多少不安を残してのスタートでした。しかし、実習担当者の計らいにより、初日は館報や教育・普及活動に関する資料を読む時間など、実習館について知るための時間を多く設けていただいたこともあり、スムーズに実習を行うことができました。また、収蔵する資料を台帳に記録するための作業では実際に資料に触れて計測を行ったり、収蔵品の写真撮影など、実際に資料に触れる機会も初日から体験させていただくことができました。その他には、教育・普及活動のフィールドワークのために野外に出て山道をお子たちが歩きやすいように伐採するなど、館の多岐にわたる活動の一部でも重要な部分を体験させていただくことができました。短い期間ではありましたが、想像していたよりも多くの貴重な体験をすることができたのは、忙しい中時間を割いて下さった担当者や八重山博物館の職員の皆様のおかげだと感じています。

初日から最終日まで通して行われた、寄贈や収集された資料を台帳に記録するための下準備としての資料の法量の計測や写真撮影では、実際に資料に触れて作業を行うことができました。資料の中には触れるだけでも破損するほど劣化がひどく脆いものもあり、講義などで学習していた時よりもさらに集中して気を遣う必要がありました。担当者の方の方針は最初から全て教えてくださいということではなく、初めにかいつまんだ説明をしてくださり、あとは実践あるのみといった様子で、とても緊張しながらの作業が続きました。資料の点数も多く、内容も民俗資料であるために、陶磁器からタオルといった民具に触れることができ、その年代も、大正時代から現代まで広い範囲のものでした。法量を計測するだけでなく、資料に記載された情報から年代を特定するという本格的な研究作業も体験することができ、博物館の収集活動に参加できたというのはとても貴重な体験だったと思います。その中で多くの気付きや経験を得ることができ、学芸員の業務内容でも現場で必要とされる体験ができたのはとても良い経験となりました。

写真撮影では、博物館実習の講義で行ったものに近い条件で資料の撮影をすることができ、足りないものは自分たちで考えて補う工夫や作業は、より講義の内容を活かして行うことができたのではないかと思います。フラッシュや反射板はなく仮設の台に白い厚紙で背景を作ったり、資料の形状によっては壁に固定して撮影するなど、講義で学習した経験をもとにできる範囲で最大限の工夫と努力をすることで対応するというのは、学芸員でなくても必要とされる力であると思いますが、より実践的に体感できたことは、将来的に生かせる部分が大いにあると思います。

教育・普及活動で行われている子ども博物館教室で利用する野外の下見と、経路を伐採し整える作業では、実際に子ども博物館教室で解説をしている方とともに史跡や山、海岸などに赴き、実際に行われる解説を織り交ぜつつ、島内のあちらこちらを回りました。自生している植物や環境をなるべく傷つけず、かつ小学生が実際に通る道の安全を確認し確保するという作業は軽い内容ではありませんでした。その作業の1週間後に行われるということでしたが、企画から開催までに多くの苦労があるということも、1部ではありますが身をもって体験させていただくことができました。この作業があった当日は終了後にはほとんど動ける状態ではなく、本当に大変な作業の中にもかかわらず解説までしていただいたことは本当にありがたいことだと思いました。

実習は1週間に満たないということで、当初はあまり実践的な体験はさせてもらえないものかと

思っていました、実際に始めてみれば、貴重な時間を割いて担当者の方が様々な実習内容を用意してくださったということがとても伝わる実習でした。資料に実際に触れる業務ができたことは、本当に貴重な体験であり、そういった実習を用意していただいた実習館の方々には感謝が絶えません。この実習の中で体験したことは学芸員としてのスキルだけではなく、将来的に社会で通用する経験になったと感じます。博物館に関する理解を少しでも深められることができ、本当に貴重な体験になりました。学芸員課程を履修して本当に良かったと思います。



写真3 収蔵品台帳に添付する写真の撮影



写真4 資料の法量の計測

石垣市立八重山博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 浦崎孔史

私は8月28日から9月2日までの休館日である月曜日を抜いた6日間、八重山博物館で実習をさせて頂きました。八重山博物館は八重山諸島の歴史や郷土品を展示している博物館です。琉球王国時代に使われていた土器や当時を漁船など生活に関わるものを主に収集しています。

館の清掃、台帳記入を中心に寄贈品を取りに行くなど様々な実習をさせて頂いた。清掃は館内と館外を清掃するというものである。館外は竹箒で敷地と館の前の歩道を清掃するものであり、敷地内に生えて居る樹木が毎日のように葉や枝、実を落とすのでその清掃である。来館者が快く館に訪れることが出来るようにする大切な仕事の一つである。館内は資料に付着したホコリやゴミなどの清掃、特に展示物をよく見ようとガラスケースに接触して付いてしまった汚れなどを落とす作業である。触れないよう注意書きしているとはいえ、展示物に触れる来館者がいるため綺麗に拭き取る必要が出てくるためである。

台帳記入は収集したモノとして博物館に存在しているが、まだ資料として登録されていないモノを登録する作業である。こちらの仕事は初めてで実習生という事もあり、まずは簡単なモノから指南して頂いた。まずは分類が何であるかを調べ年代や制作者、大きさや形状、表面に何か書かれて

いないか、または傷などの保存状況などを記入し写真の撮影を行う。ただ、年代や制作者は私たちでは、資料に記入がなければ皆目見当がつかないので出来る部分だけの記入を行った。分類に関しては、前もって担当者である学芸員の方が”漆器”や”陶磁器”などに分類して下さり、その他は貸していただいた頂いた本を頼りに作業を行った。今回私たちが台帳記入したものは家を取り壊すときに収集したものであり、明治の頃の弁当箱や沖縄がアメリカから返還される手前に使用されていたバッテリーなど珍しいものも多く、中には軍隊手帖なども収集したものに入っており、一つ一つ手に取り調べるのは大変貴重な体験だった。また、珍しいものだけではなく、”お返し”などに送られるタオルなど日用品などもあった。当たり前のように扱われているものでも誰かが保存していなければなくなってしまうので、貴重品であるかないかなど関係なしに分け隔てなく収集するのは素晴らしい収集理念だと感じた。資料の写真を撮影することは授業の一環として既に体感していたが、様々な形状の被写体を撮影するのは相当苦労した。距離や角度、光の調整など被写体によって全て変えなくてはならず、どの位置からの撮影がベストか四苦八苦しながらの作業になった。

寄贈品の受け取りは、寄贈者の家に訪れて寄贈物を博物館へと運ぶという作業であった。運ぶという作業は大して感慨などなかったが、封をしてあるダンボールを開けた時しっかりと包装していることにとっても衝撃を受けた。私達が授業で受けた時は綺麗に包装できず、不格好で何かあった時包装されている資料が些か不安になるようなものだったが、寄贈されたものはきちんと包装紙に包まれその上から新聞紙やジャバラのようなもので丁寧に包装されていた。私達のような素人同然な実習生と、学芸員として日々経験を培っているプロはやはり全く違うという事がわかった。

その他の実習としては、八重山博物館が教育活動として行っている「子供博物館教室」の下見を行った。子供博物館教室は小学生を対象に年に10回程活動している講座である。講師を呼んで話を聞いたり、气象台に見学に行き地域に興味を持ってもらうなど八重山の文化に親しんで貰う企画である。今回の博物館教室は、石垣島の部落などや特別記念物を見て回るという事で、実習場所で危険なものがないかなどを調査した。台風や大雨などで道が崩れていないか、道脇の草木が成長して道を遮っていないかなどを確認した。中には、前年度以降足を踏み込んでいない場所もあり、草が道を遮って人が通れなくなっており、鎌や鉋で切りはらい道を確保した。



写真5 資料撮影



写真6 台帳記入

授業では習わない貴重な体験が出来とても充実した実習だった。忙しい時間を割いて私たちの担当をしてくださった学芸員の方たちには、本当に感謝の言葉しかありません。

古代オリエント博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 林原美香

私は今回8月13日から8月26日までのおよそ2週間、東京都東池袋サンシャインシティ文化会館7Fにある古代オリエント博物館にて実習に行かせていただきました。

博物館では主に博物館内で行われている体験教室のスタッフ及びその他イベントの手伝い係を任せられました。実習中に任せられた主となる活動は「古代エジプトのミニ護符作り」でした。この「古代エジプトのミニ護符作り」はエジプトで実際に発掘されたが実際はガラス製の護符を元にしており、作り方も実際に古代エジプトで使われていた手法を用いております。粘土はフィモというクラフト用樹脂粘土という家などにある簡単なオーブンで加熱することで色もあまり変化することなく陶器の様な仕上がりになります。

作り方はまず、体験者にミュージアムショップにて100円お支払してもらった後、好きな色の粘土と型を選んで頂いた後、粘土玉を2～3回ほどコネ、型に手早く入れ、後は竹串でネックレスにするための穴をあけた後一気に取り出す、出来たら焼くためのシートの上に名前を書いて頂き、整理券を渡し、焼き上がりまでおよそ15分から20分ほどかかるため、その間お待ちいただく、というものでした。夏休み中とのこともあり、基本的に家族連れ、お子様中心でしたが、大人の方も一人で受けに来られていたのが印象的でした。

実習初日の午前中は、私たちスタッフがこれを教えるためにさっそく上記のことをたくさん練習しました。そして、午後からはもう実践あるのみということで接客員として駆り出され、初日は護符作り体験を覚えるだけで精一杯でした。しかし、その分慣れて上手に体験者に案内・説明をできるようになったのは嬉しかったです。工夫したことは一人一人の性格に合わせて教え方を変えてみたり、型の説明をするとき面白おかしく説明して、あるいはできるだけ質問にうまく答えりしながら、体験者に楽しく満足してお帰り頂けるよう努力したことです。

その他は、護符作りの来年の実習生の為のマニュアル作りとミイラ作り体験という他のワークショップも始まるため、ミイラに巻く包帯や衣服作りおよび小道具写真撮影を任せられました。

土曜日は、ミイラ作りとは別に開催したベリーダンス体験教室に人があまり来ていなかったこと、まだ午前中で作業も早めに終わったこともあり、盛り上げ役としてベリーダンス教室に赴かせられたことは印象的でした。行ってから1時間半ほど、ひたすら体験者に混じって、ダンスを踊りました。本来なら受けることのできないはずの非常に貴重な体験でした。

そして、日曜日遂にミイラ作り体験の日がやってきました。午前中はいつも通り体験教室の準備とミイラ作り体験の準備をしました、午後からはいつも通り護符作り体験教室スタートでしたが、人が土曜日と比べものにならないほどたくさん来ました。とにかく対応だけで精一杯でした。途中、何とか少しだけ落ち着いたのを見計らって、2人ずつ計10分ほどミイラ作りの様子を見学させてい

いただきました。小さい子たちが一生懸命ミイラの人形に包帯を巻いていて可愛らしかったのと、親御さんがものすごい勢いでその様子を写真に収めているのが印象的でした。すべて終了後片づけをしたのですが、私はその時に重要なことをやらせていただき、カノポス壺や机飾りなど絶対に壊してはいけないものの持ち運びを任されました。普段行くことのできない裏側のエレベーターや廊下を使わせていただきながら、なんとか先生と一緒に道具をぶつけないよう協力しながら最初の位置に戻したあと、元に戻り机や椅子を元の位置に戻しました。これでまず実習1週目が終了しました。

実習2週目からは、新しく体験に来た子達の先輩をやりながら、護符作りについて教え、午後か

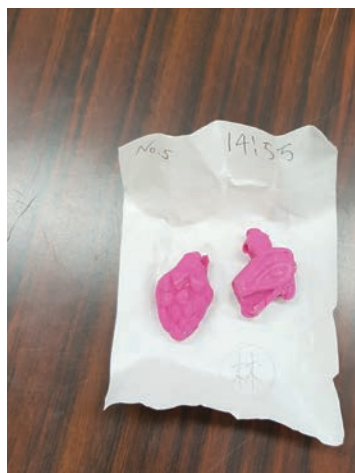


写真7 自分で作った護符



写真8 ミイラ作り体験のミイラ梱包

らはいつも通り一緒に護符作りスタッフをやりました。それ以外では、主に午前中に新しくやるヒエログリフ体験の為の粘土作りをしたり、カノポス壺のひび割れ補修作業をしたり、先週使ったミイラ作りワンセットを関西へと輸送するためにしっかり数確認、包装したり、円筒印章とファイアンスの整理整頓をしました。先週と違う点は、先週は全員護符作りに駆り出されていたのに、この週は2人が裏に残ったまま作業を任されるという点でした。私が裏に残ったときは、先ほど記述したミイラ作りに使った道具を関西に輸送するためにすべての道具がそろっているか、そして、詰め方に問題がないかのチェックを任されました。こうして書いてみると主に午前中に重要な作業をたくさん任されていたことが分かります。

今回の実習では、授業だけではわからなかった実際の現場、先生たちの忙しさや、博物館によってどの方向に重きを置いているのかも違うということ、知識や行動力の高さ及び人にもものを教える能力、絶えることのない探究心と向上心を間近で見ることができて感動しました。やはり、一番印象的なことは実践的な作業でした。ここが一番緊張しました。授業である程度知識はあったものの、いざ現場となると頭が混乱してうまくいかず、それでも先生方のアドバイスを聞きながら大きな失敗はすることなく、無事に2週間終えることができました。普段なら絶対に体験することのできない貴重な経験・知識・接客スキルを身に着けることができて本当に勉強になりました。古代オリエント博物館の職員全員に感謝しております。

〈郷土博物館での実習〉

飯能市立博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 嶋瀬沙耶佳

飯能市立博物館は平成2年に開館した歴史系の博物館で、博物館法に基づいた登録博物館です。以前は「飯能市郷土館」という名前でしたが、常設展改装に伴い平成29年から名称が「飯能市立博物館きつとす」に変更されました。この「きつとす」は、フィンランド語の「Kiitos（キートス）」からきており「ありがとう」という意味を持ちます。他にも「木と住む」、「木の文化を未来や子供たちにトスする」といった意味も込められています。「トーベ・ヤンソンあけぼの子ども森公園」や2019年完成予定の「メツァ」など、フィンランドと関係の深い飯能市ならではの愛称で750件の応募の中から選ばれました。また、リニューアルオープンと同時にビジターセンターの役割も与えられ、歴史系の博物館ながら飯能市の自然に関するコーナーも設置されています。

実習は7月27日から8月3日までの7日間で行われました。自然観察会や歴史教室といった子どもの来館者向けイベントの運営、博物館が所蔵する古文書や民具の整理、所蔵資料の展示作業といった、博物館が実際に行っている業務を幅広く体験させていただきました。

中でも、特に印象に残ったのが所蔵資料の展示作業です。「今月の一品」と呼ばれるコーナーに展示する資料の、選定から実際に展示するまでの流れを実習生4人で体験しました。まず所蔵資料の写真と名前、サイズが書かれたファイル群から自分が展示したい資料の候補を何点か選び出します。次にその資料を展示する目的とねらい、得られるメリットや効果、展示するにあたっての注意点と対策を考え、それを他の3人に発表し、最終的に1点を選びます。キャプションも自分たちで作成しました。300文字という制限の中で資料のどこに着目して書くのが重要で、4人で頭を悩ませながらキャプションを書き終えた時は、かなりの達成感がありました。その後の展示作業では、照明の向きを考えながら資料の角度や台の色と高さを決め、展示ケースが曲がっていないか細かな部分を確認しながら作業を行いました。私は当初、4人で1点の展示をするということだったので、すぐに終わってしまうものだとばかり思っていました。それは違いました。実際は1日がかりの大作業です。この展示で何を伝えたいのか。この展示を見た来館者に何を感じ、何を学んでほしいのか。限られた展示スペースの中で、多くの中から選ばれた1点の資料にはそういった思いが込められています。自分が見せたいと思ったから展示するだけでは陳列になってしまいます。この実習を通して、私は展示と陳列の違いについて身を持って体験することができました。

今回の実習では、上記の展示作業以外にも多くのことを学ばせていただきました。座学で学んできたことと共通するものもありましたが、業務は多岐に渡り博物館の現状は館ごとに違います。例えば、飯能市立博物館は、市の地方創生プロジェクトの一環としてビジターセンターの役割を新しく与えられました。ビジターセンターとは周囲の自然に関する情報の提供と発信、展示を行う施設のことです。博物館は社会教育施設であり、博物館の業務は全て来館者の学ぶきっかけ作りに繋がっていると私は考えています。ビジターセンターも観光案内以外に、そうしたきっかけ作りの場として運営されていくのではないのでしょうか。こうした飯能市立博物館の例から、博物館のあり方が大

大きく変わってきているように見えました。

最後になりますが、実習生として受け入れてくださった飯能市立博物館きつとすの職員の方々に感謝申し上げます。



写真9 自然観察会の様子



写真10 実際に展示した「今月の一品」

飯能市立博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 杉ひかり

私は2018年7月27日から8月3日までの休館日を除く7日間、飯能市立博物館で実習をさせていただきました。飯能市立博物館は埼玉県飯能市にある博物館で飯能市内を「里」「町」「山」の3つに区分し、歴史と文化にまつわる調査研究や展示を行っている博物館です。また、平成30年4月1日にリニューアルオープンし、飯能市郷土館から飯能市立博物館に名前を変えたことにより飯能河原・天覧山周辺の自然ビジターセンター的機能も追加されました。

今回の実習では、7月28日に行われた「自然観察会」と8月2日に行われた「夏休み子ども歴史教室」の教育普及活動と、7月29日に民具整理と8月1日・3日に古文書の整理、7月31日に「今月の一品」の展示作業を行いました。

「自然観察会」では、当初は実際に参加者(小学生と保護者)と飯能河原に石を拾いに行き、その石を館に持ち帰り石の見分け方の講義を受けて自分で石の標本をつくるという予定でしたが、台風の影響で飯能河原には行かずに、館があらかじめ用意した石を使用して標本づくりをすることになりました。実習生は前日準備と当日の運営に関わらせて頂きました。前日準備では、担当者の方に当日講義する内容と石の見分け方を説明して頂いた後に、河原に石を拾いに行き、会場作りと当日の役割と流れを確認しました。当日は参加費の徴収・座席案内・石の見分け方を説明したりしました。

2回目の「夏休み子ども歴史教室」は、小学生を対象に午前と午後の部の2回、刀剣についての講義と実際に自分で持って鑑賞するもので、実習生は前回同様にイベントに関わりました。前日に担当者の方に当日の講義を受け、刀剣の鑑賞・分解・手入れの方法を学び、会場作りと当日の役割と流れの確認をしました。初めて刀を鑑賞し自分で分解して手入れをしましたが、想像していたよりも重く、実際に人を切って地面まで貫通したことがあるものと聞きとても緊張しました。刀は指

や身体を簡単に切れてしまうため、当日は小学生が扱っているときは怪我や事故が起こらないように特に緊張感を持って見ていました。稀に危険な持ち方をしてしまっていた時は、「その持ち方は危ないよ」と注意することもありました。2回の教育普及活動のイベントでは普段関わることのない小学生を相手にするため、声の掛け方や説明の仕方など、どのようにしたら良いかがわからずに困惑することもありましたが、担当者の方や他の実習生の真似をして何とか乗り切ることが出来たと思います。また、安全面の配慮の重要性と難しさを体験しました。

民具整理では、資料カードに民具のスケッチをし、そこに長さや傷の有無などを記入して行きました。写真を撮ることもあるそうですが、実際にスケッチすることで資料と向き合う時間が長くなるため、今まで気づかなかった模様や傷などを発見することができるという話を聞き、手作業の大切さを知ることが出来ました。古文書の整理では、寄贈された古文書を1つ1つ専用の中性でできた封筒に入れ、どんな内容が書かれているかを読み取り資料カードに記入して行きました。古文書には現代では使われていない文字や、繋げて書かれているものばかりで読める文字の方が少なく、尾崎館長に教えていただきながらの作業でした。また、古文書は文字だけでなく、絵だけ描かれたものも扱いました。古文書の整理では、同じ日本人で同じ漢字を使うのに、時代によっては読めなくなってしまうことに時代の流れと歴史を感じました。そして、そこに書かれている内容を後世に伝えるためにも学芸員の方は専門性が高くないと務まらないと改めて思いました。

「今月の一品」とは、月替わりで学芸員の方がテーマを決め、一品(逸品)を入り口の展示台に展示することで来館者の方をお迎えするものです。今回は8月の一品を担当することになりました。最初に資料カードを元に各自で資料を選び、全員で選んだ資料をプレゼンし一品を決めますが、数千点ある資料の中から、目的・ねらい・季節等を考慮した上で縦横60cmの展示ケースに入るものを選ぶことは大変でした。一品の決め方は1日でキャプションの作成と展示までを行うため、キャプションの書きやすいもので季節、目的等がしっかりしているものを全員で選びました。キャプションは、民具辞などを使い、資料選び同様に各自で考えた後に全員で話し合い、完成させました。全員の意見の中からどの情報をどう使うかを考えていくので、1人で考える時とは違った難しさがありました。最後に展示ケースに展示しました。博物館実習の授業でも思いましたが、どの向きでどの台座を使い展示していくかを決め1cmでも違うと違和感があり、これといった正解が1つではないため



写真 11 夏休み子ども歴史教室の様子



写真 12 今月の一品で実際に展示した資料

難しかったです。

私は今回の実習を通して学芸員の専門性、資料の扱い方と説明する能力について、体験することができました。そしてそれらの能力はどれも繋がっていて、どれかだけでは博物館を運営していくには成り立たないことを改めて実感しました。また、4年間大学で学んだことを実際の現場で見ることができたことはとても貴重で、その場でしか学べないことや初めての体験が多く、本当に充実した7日間でした。

《理工博物館での実習》

さいたま市青少年宇宙科学館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 小林 翔汰

私が実習として選んだ博物館は、さいたま市青少年宇宙科学館という宇宙科学と主目的とした科学館である。対象は小学生低学年を対象とした客層が多く、家族連れが主な来館者である。展示物は、宇宙や星に関するパネル展示や宇宙船などの模型を使ったものが展示されており触れる展示物が多い。また、プラネタリウム設備があるので自分たちの澄んでいる夜空がどのようなものなのかを知ることで宇宙や星に関心を持ってもらうことを取り組んでいる。

実習ではC班の所属メンバーとして8月7日から2週間の実習に参加、夏休みという長期休暇の中で子供達が自由研究として活用できる「スライム、シャボン玉」を題材にサイエンスショーを実践、ワクワクワークショップでは、「スライム」を作る準備と運営に関わった。

ワクワクワークショップ（スライム用の液の準備）： スライム液の準備はまずどの程度の割合でスライムが固くなるのか、その為に必要な適切な量はどのくらいなのかといったものを調査する必要があった。その為、私たちが最初に行ったのは、指導員の方から教わったそれぞれの液の分量を変えればどのくらいの固さのスライムができるのかといった実験を数回行った。結果として、液の分量の変化で固さが大きく変わっていくことをメンバーで情報共有することができた。しかし、やはり最初に教えてもらった分量を目安にお客さんの「柔らかいスライムにしたい」、「固いスライムのほうが欲しい」という声に対応するため、柔らかくするにはどうすればよいか、固くするにはどうすればよいかを相談し、対応策を練った。柔らかくするには水を追加していくこと、固くするには水分を蒸発させるということが必要であるとわかった。その結果、液の分量は変わらずに割合を調整しての実験に移行した。次に行ったのはスライムの液の割合をどのようにするかであった。特にA液（洗濯のりと水の調合水）はどのくらいの割合で柔らかすぎず、固すぎないものになるのか、試行錯誤の連続であった。最初に渡されたプリントに1：1の比率（洗濯のり1、水1の比率）として書かれていたのでまずはその内容と作り方に沿って液を作りスライムを作った。特にA液の調整によって固さに変化が生じることを確認した。色とB液に関しては、大きな変更はしないことになった。その為、A液の比率をどの程度にするかを今後のワークショップ運営で、来館者の様子等を見ながら調整していくこととした。



写真13 A液作成中の写真

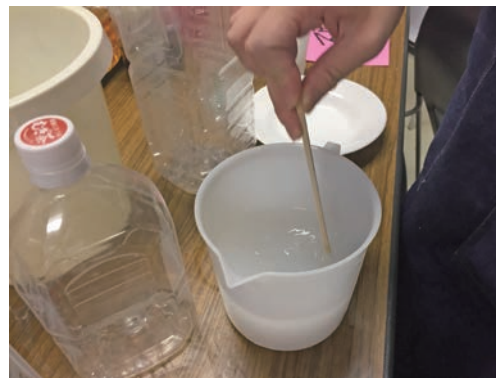


写真14 シャボン液の調合中の写真

サイエンスショー： C班のサイエンスショーでは「身近な科学」というテーマで計画と運営をした。内容はスライムとシャボン玉の2つでスライムに何を加えたらどのような変化を起こすのか。シャボン玉に何を加えたら割れにくくなるのか。また、シャボン玉の中の空気を変えたらどのような反応をするのかといったものである。ショーということでもあるので、エンターテインメント性を持ちつつも、科学実験として学習の意欲に繋がるように計画した。その為、特に材料選びと試行錯誤と伝え方には特に力を入れた。自分の実験を担当するときは、司会ではカメラワークと話すスピード、アシスタントでは焦らず的確にやることを心がけた。司会を担当したときは、自分自身の話すスピードが速いということを理解していたので、その上でどのようにしたら話すスピードを遅らせることができるかを考えた。他の人のサイエンスショーを見ることでどんな間合いでどんなトーンで話しているのかを研究していった。また、テレビでやっていた話のやり方を真似することで自分の強化に励んだ。



写真15 スライム液にレモン汁を入れての実験テスト

二週間という短い中で、私にとって博物館を運営していくことの難しさを肌身で学ぶことができた。自分が社会に出ていく中で、お客様にどのような対応をすればいいのか、どのような表情でいればいいのかといったビジネスルールも学ぶことができ、自分の社会進出のために役立つようなことがとても多かった。字を綺麗に書くことや組織で動く上で失敗を誤魔化さないことは自分の評価に繋がるということでもあり、会社の評価にも繋がっていくということを職員の皆様から学び感じることができた。自分に今何が足りていないのか、自分の身の振り方を、今後どのようにしていけばいいのかと考えていけるとことがたくさんでき、自分のスキルアップをしていくための課題を見

つけることができた。そして、自分がこれからの目標を考える材料にもなった。自分の成長に繋がるようなこと、改めなければならないこと、自分の持っている力を認識することができた。学校の講義以上にどのようなことをしていけばいいのか、実際に働いて感じたこと学んだことをこれからの人生に活かし、自分が学芸員の資格を持つ人間として、活動していけるように日々精進していきたい。

《美術博物館での実習》

東京富士美術館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 虎見有紗

私は、東京都八王子市にある東京富士美術館にて8日間の博物館実習をさせて頂いた。東京富士美術館は「世界を語る美術館」として活発な海外交流展による文化交流の促進、当館の日本美術や西洋コレクション展を海外各地で開催し、海外とのつながりが非常に強い美術館である。近隣住民の来館はもちろん、周辺大学との連携も行っている。

今回の実習では、美術館での学芸員の業務について、午前中に実習や講義を受け、午後に最終日に発表をする自らが考えた企画展示の課題研究を行った。1日目はオリエンテーションと施設の視察について、2日目は日本美術の取り扱い実習について、3日目は教育普及や広報、関連業務について、4日目はデータベースと美術品の取り扱いについて、5日目は西洋美術の取り扱いについて、6日目には展示作業について、7日目には展示企画や美術品の保存について、8日目には今までのまとめとして1日目から作り上げていた企画展示の発表を行った。

私が特に印象に残っていることの一つ目は、実習の合間にあった収蔵庫の見学や、資料の貸出搬入だ。実際に美術館の中に入らなければまず見る事が無いので、よく観察させていただいた。収蔵庫は温度や湿度によって資料を分けて管理されていた。収蔵庫の温度や湿度管理については事前に大学の講義で学んでいたが、それが実際の現場で行われている場を見る事が出来、さらに理解を深める事が出来たと思う。

5日目の西洋美術の取り扱いの時、モネの作品を海外に輸送した時に実際に入っていた輸送用ケースの見学をした。私は説明をしてくださった学芸員の方の「ロシアに往路で着いた時に雪が降っていた」という話を聞き、外気の温度差が激しい時でも梱包をしっかりすることによって作品がある輸送用ケースの中の温度や湿度の変化を小さくし、作品のダメージを防ぐ事が出来ることを実感した。輸送用ケースは実際の絵画が入るサイズよりも一回りも二回りも大きく作られている。実際に入っている部分だけにすれば、もう少し小さくできるだろう。しかし、慎重すぎるくらい丁寧かつ頑丈に梱包することによって、作品が外部から受ける衝撃も、温度や湿度の変化も抑える事が出来る。この絵画が輸送された時期は2月のロシアだった。学芸員の方の「飛行機に乗せるまでにずいぶん時間がかかってしまい作品の輸送用ケースに雪が積もっていた」という話からも考えられるように、梱包は慎重すぎるくらいが丁度良いのだと思う。

私が特に印象に残っていることの一つ目は、6日目に行った展示作業だった。ここでは絵画のレ

プリカを使い、実際に学生が5人のチームになり展示を行った。前提条件として「3枚の絵を等間隔に並べること」、「展示するにあたって順番を決めること」、「高さが絵の中心が150cmになること」という3つの指示があった。また、今回は軽いものを展示するという前提で、ワイヤーで吊るのではなく壁にピンを打ち込んでそれに引っ掛けるようにして展示をする。そのため、展示をする場所が絵画の上から3分の1くらいの箇所になる。

この展示で難しかったことは、3枚の絵が等間隔に並べられる距離を測ることだと思う。私は主に皆が計算するのをアシストしていたが、横の距離と縦の距離がきちんと条件に決まるまでに何度かやり直しをした。隣のチームがだいたいの幅を持たせて測っていたら上手くいったと言っていたので、計算をきっちりやるというよりは少し幅を持たせておいた方が上手くいくのかもしれないと思った。

絵を等間隔で展示することは簡単なようで難しい。少しのズレでも人の目には違和感として残るし、角度が少しずれているだけで分かるものだ。私はもののズレに気付く方で、絵画のズレのチェックをしていた。実際の展示では感じたことはないが、そうしたズレも許さず展示をすることが大切



写真 16 展示実習中の様子



写真 17 展示実習で使われていた絵画

で、妥協しないようになされているのが良く分かった。

学芸員自らが展示をすることはないと説明の中で話があったが、絵画の搬入の際に最終のチェックとして行うことはあるそうだ。今まで美術館の展示について考えることもまじまじと見ることもなかったが、これからは展示方法についてもよく観察してみようと思う。

今回の博物館実習では、8日間という短い期間ではあったが、美術館についてありとあらゆることを学ぶことが出来た。事前の大学での講義で学んでいたことが実際の現場でどう使われているのか、実際に見て体験出来たことが実習における一番の成果だと思う。資料の取り扱いに関する実習はもちろん、自分で企画展示を考えて発表をした。自分で考えた企画展示の為に、その作品の情報をかき集めたり、構成を考えたりすることは大変ではあったがとても有意義であり、興味深いことであった。今回学んだこと、考えたことを今後にも生かしていこうと思う。お忙しい中、東京富士美術館の方々には、たくさんの貴重な体験をさせて頂きました。仕事の合間にも関わらず、博物館実習を快く受け入れてくださり、また丁寧なご指導をしてくださり、大変ありがとうございました。

Ⅲ. 司書教諭課程

駿河台大学 司書教諭課程について

メディア情報学部 教授 杜 正文

司書教諭課程の概要

学校図書館法第5条第1項には、「学校には、学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かなければならない」と規定されており、2003年度以降、12学級以上を有する小・中・高等学校に司書教諭を置くことが義務付けられた。駿河台大学では、2004年度に司書教諭課程を設置し、司書教諭資格を取得するために必要な資格申請を行えるようになっている。

司書教諭資格を取得するために

学校図書館法第5条第2項には、「前項の司書教諭は、主幹教諭（養護又は栄養の指導及び管理をつかさどる主幹教諭を除く。）、指導教諭又は教諭（以下この項において「主幹教諭等」という。）をもって充てる。この場合において、当該主幹教諭等は、司書教諭の講習を修了した者でなければならない」と規定されている。この規定に従い、本学では、司書教諭課程を修了して、資格を取得する要件として次の2条件を設けている。

(1) 教育職員免許状を有する者あるいは教育職員免許状取得見込みの2年次生以上の者

(2) 司書教諭の講習科目5科目10単位を取得していること。

(1) および(2)の条件を充たすため、教職資格の取得を目指す大学在學生は2年次以降に、もしくは既に大学や短大を卒業して教職資格を所持する者は科目等履修生などとして、司書教諭課程において資格取得に必要な科目を履修し、その単位を取得できる。

司書教諭を取得するための講習科目および単位数

本学は、文部科学省の委嘱を受けて、2004年度に学校図書館法で定める司書教諭の講習科目に相当する授業科目を開講した。本学で開講している司書教諭課程の授業科目は学校図書館司書教諭講習規定に定める科目と全く同じ名称のもので、以下の5科目10単位である。

	本学における司書教諭課程科目	単 位	配当年次
必修科目	学校経営と学校図書館	2	2・3・4
	学校図書館メディアの構成	2	3・4
	学校指導と学校図書館	2	2・3・4
	読書と豊かな人間性	2	2・3・4
	情報メディアの活用	2	3・4

司書教諭資格の認定

司書教諭に関する科目を履修し、所定の単位数を修得した者は、文部科学省が委嘱した学校図書館司書教諭講習実施大学の講習修了者として登録される。文部科学省へ司書教諭の資格を申請し、文部科学省から「司書教諭講習修了証書」が交付されて、司書教諭資格所持者となる。

=資料=

博物館実習協力館および受入人数一覧(過去3年間)

【2016年度】

No.	所在	館種	2016年度実習協力館	実習人数
1	埼玉	総合	埼玉県立川の博物館	1
2	埼玉	総合	入間市博物館ALIT	1
3	埼玉	郷土	飯能市郷土館	2
4	東京	郷土	江戸川区郷土資料室	1

【2017年度】

No.	所在	館種	2017年度実習協力館	実習人数
1	東京	歴史	古代オリエント博物館	2
2	東京	歴史	一般財団法人 家具の博物館	1
3	埼玉	総合	埼玉県立川の博物館	1

【2018年度】

No.	所在	館種	2018年度実習協力館	実習人数
1	沖縄	歴史	石垣市立八重山博物館	2
2	埼玉	理工	さいたま市青少年宇宙科学館	1
3	埼玉	郷土	飯能市立博物館	2
4	埼玉	総合	入間市博物館ALIT	2
5	東京	美術	東京富士美術館	1
6	東京	歴史	古代オリエント博物館	1

2018年度資格課程・司書教諭課程修了者

(司書課程)

法学部
法学科

阿部 直哉
境藤 祥太

メディア情報学部
メディア情報学科

岩本 英士
宮方 あん
請外 庄一郎
浦崎 孔史
大和田 奈緒
嶋瀬 沙耶佳
鈴木 美紅
田口 冬輝
徳嶺 華子
戸田 琴音
虎見 有紗
長崎 航大
馬場 英明
星野 朝美
招 夏美
山越 彩香

現代文化学部
現代文化学科

川杉 維吹

心理学部
心理学科

阿南 秀平
近藤 大祐
村上 聖

計22名

(学芸員課程)

メディア情報学部
メディア情報学科

請外 庄一郎
浦崎 孔史
小林 翔汰
嶋瀬 沙耶佳
杉 ひかり
戸田 琴音
虎見 有紗
林原 美香

心理学部
心理学科

新井 岳志

計9名

司書課程科目担当教員一覧（2018年度）

《専任》

[教員名]	[担当科目]
岩熊 史朗	コミュニケーション論
寺嶋 秀美	情報処理概論
水沼 友宏	図書館情報学／図書館・情報センター経営論／図書館情報システム演習／ 図書館サービス論（図書館サービス概論）

《非常勤講師》

[教員名]	[担当科目]
蟹瀬 智弘	情報組織化論（情報資源組織論）
河野 剛彦	歴史資料論
狐塚 賢一郎	生涯学習論
小西 和信	情報組織演習Ⅰ／情報組織演習Ⅱ
小南 理恵	情報サービス論
近藤 真司	生涯学習概論
篠塚 富士男	図書館情報技術論／情報サービス演習Ⅰ（基礎）／ 情報サービス演習Ⅱ（発展）／情報資料論（図書館情報資源概論）
中村 順子	児童サービス論

司書教諭課程科目担当教員一覧（2018年度）

《専任》

[教員名]	[担当科目]
杜 正文	情報メディアの活用

《非常勤講師》

[教員名]	[担当科目]
杉山 悦子	学校経営と学校図書館／学習指導と学校図書館／ 学校経営と学校図書館／学校図書館メディアの構成 学習指導と学校図書館／
中村 順子	読書と豊かな人間性

学芸員課程科目担当教員一覧（2018年度）

《専任》

[教員名]	[担当科目]
伊藤 雅道	環境生物学Ⅰ／環境生物学Ⅱ／生命の科学Ⅰ／生命の科学Ⅱ
井上 智史	マルチメディア論
井上 久士	歴史学Ⅰ／歴史学Ⅱ
今村 庸一	メディア社会学
海老澤 豊	歴史学Ⅱ
大久保 博樹	音響メディア論
大森 一宏	経済史Ⅰ／経済史Ⅱ
岡田 安芸子	日本文化論Ⅰ／日本文化論Ⅱ
木塚 隆志	西洋文化史
黒田 基樹	歴史学Ⅰ／法史学Ⅰ（法史学）
狐塚 賢一郎	生涯学習論
斎賀 和彦	映像メディア論
寺嶋 秀美	ネットワーク構築論
杜 正文	データベース設計論
信岡 奈生	文化人類学Ⅰ／文化人類学Ⅱ
野村 正弘	博物館資料保存論／博物館実習
増田 珠子	歴史学Ⅰ
村越 一哲	アーカイブズ学
本池 巧	現代自然科学Ⅰ／現代自然科学Ⅱ

《非常勤講師》

[教員名]	[担当科目]
枝川 明敬	博物館経営論
尾崎 泰弘	博物館資料論
河野 剛彦	歴史資料論
近藤 真司	生涯学習概論
野木 道記	博物館展示論／都市と文化施設
羽田 武朗	博物館教育論
前川 公秀	博物館概論／博物館情報学

駿河台大学 資格課程 年報 第19号

発行日 2019年4月30日

発 行 駿河台大学 資格課程

〒357-8555

埼玉県飯能市阿須698番地

TEL 0429-72-1110

